

朱淵清著、高木智見譯『中國出土文獻の世界』（創文社、二〇〇六年）

李學勤が「著者、朱淵清氏は、出土簡帛の研究を専門とする研究者であり、……本書に見られる敘述やコメントは、簡明で要領を得た表現となっているだけでなく、非常に本質的な見識を含んでいる」（本書「日本語版序」として）ように、本書は前漢時代から二〇世紀末までに発見、發掘された重要な出土書籍（簡帛資料）を厳選・網羅して、的確に問題点を洗い出して要領よく諸説を整理しているとともに、それらの発見・發掘によってもたらされる歴史的意義について、極めて示唆に富む見解が隨所に述べられている。

本書の意義は、「曖昧模糊としてしまっている古代研究の全體狀況を大きく照らし出し、明確な輪郭を與えることが求められている」が、「本書がまさしくこの要求に應え、簡帛研究の全體狀況を明らかにし、明確な輪郭を與えている……。本書は、先秦から現代に至る出土文字資料の研究狀況、とりわけ簡帛資料（朱氏の言葉では出土書籍）の研究の歩みとそれが學問に與えた影響を描ききっている」と譯者の高木氏が「あとがき」で述べている通りである。

出土資料とそれに関する研究論文は、今も日々増加し続けている。それだけに全體像やその見取り圖や案内圖や羅針盤がぜひとも必要なのであり、本書はそうした要求に見事に應えるものとなっている。また出土資料によって新たに得られた知見によって、舊來の文獻學、學術・思想史、政治史・歴史などの見解を今一度丁寧認識し直す作業

がぜひとも必要であることも、本書を読むとよく分かるのである。

取り上げられている主な項目は、孔壁書（孔子の舊宅から出た『古文尚書』など）、汲冢書（『竹書紀年』・『穆天子傳』など）、甲骨學（出土した刻辭甲骨の總數は、ほぼ一〇萬片）、敦煌學（五世紀から十一世紀に至る文書の五萬點以上の発見）、簡帛學（孔壁書・汲冢書以外の歴代の発見。居延漢簡など二〇世紀前半に西域で発見された簡牘から、近年発見された郭店楚簡・上海博物館藏戰國楚簡まで）、石經（石碑や磨崖に刻まれた儒家・佛教や道教の經典）、金石學（青銅器に鑄込まれた殷—戰國時代の銘文、西周時代のものほぼ三〇〇〇點餘り）、盟書（誓約書のこと。載書ともいう。五〇〇〇點餘。形状・文字とも良好なもの六五六點）等々である。

また全ての訓讀につけられている和譯、専門用語の注記及び本書末尾に譯者によって付された「出土簡帛書籍索引 二〇〇五年まで」「主要文獻・重要語句索引」「人名索引」は有難く、本書の利用價值を一層高めるものである。（武田秀夫）